

龍草廬の和歌

——峯のまさかき・ならの葉・国風草廬集を中心に——

伊 藤 達 氏

【キーワード】 草廬／家集／和歌／漢詩

はじめに

龍草廬（正徳五年（一七一五）～寛政四年（一七九二））は十八世紀中頃から後半にかけて、京詩壇に重きをなした漢詩人であり、その詩人としての活動は元文から寛政年間に及ぶ。草廬の事跡については東條琴台の『先哲叢談後編』（文政十二年刊）、友野霞舟の『錦天山房詩話』（弘化年間成）に記されているが、琴台が記す草廬像については事実関係に誤りがあることを中野三敏氏が指摘し訂正を試みられている⁽¹⁾。諸伝記によれば、草廬は山城伏見に生まれ、少年の時父を亡くし家郷を出、京に移り独学研鑽し⁽²⁾、元文四年に市中で私塾を開き、後に詩社幽蘭社を結成し多くの

門弟を育て、宝暦七年には彦根藩文学となり藩儒として出仕し、安永三年六十を機に致仕し、京東山に居を下し文事に遊んだ。詩集『草廬集』は宝暦三年に初編が刊行されており、第七編（享和三年刊）にまで至る。その他、韻書に『仄韻礎』（延享五年刊）、明代の謝榛の詩を編纂した『謝茂秦山人詩集』（宝暦十二年刊）、晩年に成った三種の紀行文、あるいは墨帖など多くの著編を上梓している。土庶から発起し一門を興し、文学を以って大藩に出仕したことを見ると、当代において最も成功した漢詩人の一人であろう。

漢詩人としての活動・詩論については松下忠氏によって概略が示されており、氏によれば、詩論については古文辞派と大よそは同基調であり、文は秦漢、詩は盛唐を標榜し中晩唐・宋詩を排斥する。但し中年以降に徂徠批判の言があること、古文辞派が推奨する所謂李・王（李攀竜・王世貞）よりも謝榛を理想としたことなどを草廬の特質を示すものとして挙げられている³⁾。近世中期以降はそれまで盛行した古文辞派の詩論から山本北山の『作詩志毅』（天明三年刊）に見られるように、自己の感情の表出を第一とする性靈説が主流になっていくが、漢詩人としての草廬はその分岐点の時代にいたと言えよう。草廬の漢詩については近時論考が相次いで発表され、望郷の視点から論じた福井智子氏の考察、安保博史氏の草廬の詩の表現と幽蘭社の展開についての一連の論考、陶淵明・李白の影響を見た藤田真一氏の論、次いで日野龍夫氏にも草廬の詩を考察する上で有益な論文が備わる⁴⁾。

このように漢詩人としての草廬の姿は徐々に明らかにされつつあるが、草廬には漢詩人としての他に国風を善くする歌人としての一面があった。近世期に漢詩をものする傍らまとまった詠歌を残した詩人と言え、伊藤仁斎（『古学先生和歌集』）や元政（『草山和歌集』）を思い起すが⁵⁾、草廬には『峯のまさかき』『ならの葉』『国風草廬集』という三種の家集が存し、累計六二六首が収められる。『古学先生和歌集』が二八七首、『草山和歌集』が一五〇首である

から、草廬は詩業の傍ら歌を詠むことにも旺盛な意欲を示していたと言えよう。草廬の和歌・歌人としての活動については中野氏の一連の草廬研究に指摘があり、揖斐高氏には草廬が自詠二一八首を師の賀茂真淵（宝暦八年頃入門）に添削を乞うた『賀茂真淵評草廬和歌集』についての論考があり、結局古今調の草廬は真淵の提唱する古風を受け付けることはなかったと結論付けられている。⁷⁾ なお近時、雲岡梓氏は草廬は和歌を古風に戻したいという希望を持ちながらも、真淵のように『万葉集』を規範とすることはなく、後世風の詠みぶりの中に万葉集の語彙や表現を摂取するに留まったとし、草廬の万葉歌摂取が表面的なものであったと評されている。⁸⁾

草廬の和歌研究については三氏の研究が最新の成果であるが、本稿では草廬の和歌について、はじめに三種の家集の整理、次に具体的な表現の様相、漢詩との繋がり、草廬の和歌観の四つの視点を中心にして考察していきたい。

一 三種の家集の諸本

はじめに草廬の三種の家集の諸本についてその構成と共に記しておきたい。草廬の家集は三種とも刊行されており、雑纂形式である。全種刊記はないが、序跋の年記をみると安永七年から天明二年に記されており、おそらく草廬在世中に上梓したものである。以下に執筆者の調査の及んだ諸本の書誌的事項を掲げておく。

『峯のまゆかき』 刊一冊

①内閣文庫本（国立公文書館。請求記号、201-692）。序「草廬和哥題言／安永己亥春 伏水龍氏ノ女貞 淡海之東水

岫岡ノ下ニ書ス」安永八年龍貞記。「みねのまさかきてふふみにしるす／安永いぬのとし初春龍氏女貴ひがし山のふもとに菊のたに水をしたて、草の跡つけぬ」安永七年龍貴記。跋「伊勢祠官正四位下荒木田武遇女」荒木田麗記。全六十首。

②岐阜市立図書館本（請求記号、91-49）。①と同じ。但し、歌の排列は①と異なる。

③村上文庫本（刈谷市中央図書館。請求記号、5589）。①と同じ。歌の排列はおよそ②と同じ。

④稼堂文庫本（金沢市立図書館。請求記号、091.8-129）。①と同じ。歌の排列は②と同じ。

⑤森文庫本（大阪市立大学。登録番号、J-6808）。龍貞の序を欠く。①②③④⑦の麗の跋文は序文として掲載され、末尾一行半分と自署を欠く。歌の排列は①②③④⑥⑦と異なる。

⑥雑賀重良旧蔵書本（名古屋市蓬左文庫。請求番号、雑890）。①と同じ。歌の排列は②と同じ。

⑦鈴鹿文庫本（愛媛大学図書館。請求記号、911.133/468）。①と同じ。但し「元政上人の身延道記、人にかりて返し遣すとて」「雪のころ、慈門尼へまうしつかはしける」の二首を欠く。全五八首。歌の排列は②と同じ。

*国会図書館本（請求記号、212-34 / 『ならの葉』Ⅰ類本と合冊）。実は『ならの葉』Ⅱ類本。同Ⅱ類本⑥を参照。同館の所蔵書名は『峯のまさかき』。

序文の龍貞・貴は草廬の長女・次女、「荒木田武遇女」は荒木田麗のことであり、多くの擬古物語を著したことで知られるが、草廬とは実際に親交があった。貞の序文によれば、貴とともに父に和歌を乞うたところ自書して一帖を下され、姉妹で模写し「草廬和歌」と名付け、後世にその歌が残るように上梓したことが記される。貴の序文にも同

内容の経緯が記されている。麗の跋文は四二行に及ぶが、冒頭に草廬が和漢両才を兼ね備えており、漢詩は諸国から門弟が集まり詩集も世に広まっているが、和歌については詩ほど知られておらず、安永七年女たちの願いにより自撰・自書し、「みねのまさかき」と「ならの葉」の二巻を合わせて「草ぶせの翁の国ぶり」と名付けたとある。次に紹介する『ならの葉』と本書は同時期に成ったことが知られる。①～⑥本までは排列に異同が見られるが歌に出入りはなく全六十首を収め、⑦本のみ他本が収める二首を欠いている。国会図書館本は貴の序文を有するものの、所収歌を閲すると五首以外は『ならの葉』Ⅱ類本と共通しており、『峯のまさかき』からは除外し、同Ⅱ類本と認めることにする。書名は「はるたちける日」で詠まれた巻頭歌「ひさかたのあまのかく山春くればみどりに霞む峯のまさかき」に拠る。

『ならの葉』Ⅰ類本 刊一冊

①森文庫本（登録番号、J-6768）。序「ならのはといふふみにしるす／たつ氏輝いやまひてまうす」龍輝記。跋「伊勢祠官正四位下荒木田武遇女」荒木田麗記。全六四首。

②国会図書館本（請求記号、212-314）ならの葉Ⅱ類本と合冊）。①と同じ。

『ならの葉』Ⅱ類本 刊一冊

①森文庫本（登録番号、J-13597）。序「ならのはといふふみにしるす／たつ氏輝いやまひてまうす」龍輝記。荒木田麗記。麗の序文は『峯のまさかき』跋文の末尾二行分と自署を記すのみ。全七二首。

②佐野文庫本（新潟大学付属図書館。整理番号、36/160）。①の輝の序文あり。麗の序文なし。跋「安永己亥首夏日／華頂山下藤堂良璞謹書」安永八年藤堂良璞記。歌の排列は①と同じ。

③加賀文庫本（都立中央図書館。請求記号、4946）。序は①と同じ。②の良璞の跋文なし。歌の排列は①と同じ。

④加賀文庫本（同右。請求記号、4947）。①の輝の序文あり。麗の序文なし。②の良璞の跋あり。歌の排列は①と同じ。

⑤村上文庫本（刈谷市中央図書館。請求記号、3530）。序・跋④と同じ。歌の排列・所収歌は①と同じ。但し、巻末歌「故郷虫／たかまどのをへの宮はあれはて、幾世ふりにし鈴むしの声」は他本に見られない。全七三首。

⑥国会図書館本（請求記号、212-34）。『ならの葉』Ⅰ類本と合冊。龍貴の前掲「みねのまさかきてふふみにしるす」の序あり。龍貞の序・麗の跋文を欠く。実は『ならの葉』Ⅱ類本であり、『峯のまさかき』所収歌と同一歌は五首のみ（「はるたちける日」「若菜を」「花」「花たづぬとてこの山のほとりに一夜とまりて」「寄草恋」）。Ⅱ類本が共通して収める「古宮秋来」「寄櫛恋」「月前梅」「古寺鐘」「樵逕雪」「里擣衣」「閑居のやまぶきを」を欠く。全六四首。

『ならの葉』は歌数と所収歌に出入りがあり、二種に分類した。仮に『ならの葉』Ⅰ類本、『ならの葉』Ⅱ類本と称する。両集に共通する歌は一〇首である。国会図書館本『峯のまさかき』は先述したように所収歌からⅡ類本に認められるものである。序を記した龍輝は草廬の三女、姉（貞・貴）に倣い父の手跡を模し版行したとある。Ⅰ類本の麗の跋文は『峯のまさかき』から転用したものであり、同文。Ⅱ類本も同様であるが、①本に一部が掲載されているのみで全文の掲載はない。②④本には藤堂良璞の四行から成る跋文がある。良璞は草廬門の岡崎廬門が編纂した『麗澤

詩集』（安永八年刊）に「字成玉。平安人」とある。書名は「古宮秋来」題で詠まれた巻頭歌「ふく風もけさ音かへてならの葉の名におふみやにあきはきにけり」に拠る。なお姫路文学館金井寅之助文庫に『みねのまさかき』『ならの葉』の二冊が所蔵されているものの、未見である。他日を期したい。

『国風草廬集』上下 刊二冊

①肥前島原松平文庫本（島原図書館。請求記号、1388）。序「天明壬寅春二月朔／祭主正四位下大中臣寛忠」天明二年藤波寛忠記。「草廬集／門人あはぢの国なる坂東直恭ぬかつきをがみす」坂東直恭記。跋「天明壬寅春花朝／授業弟子従五位下上総介紀好符伯瑞撰併書」天明二年藤木好符記。巻末に坂東直保の「草廬竹翁先生小傳」を附す。同じく巻末に坂東直勝の自詠五首を附す。全四二九首。重複歌一二首。

②森文庫本（大阪市立大学。登録番号、J-6769）。①と同じ。

『峯のまさかき』『ならの葉』が編まれた安永八年（一七七九／草廬六五歳）から三年後の天明二年（一七八二／草廬六八歳）に『国風草廬集』が編まれた。草廬の家集としては最後に位置するものである。全四二九首を数えるが、家集内部での重複歌が一二首あり、重複歌を除くと実数は四一七首である。先行二家集の所収歌を四六首収めているが、歌数から見ても最大規模のものであり、歌人としての草廬にとって集大成というべき家集である。直恭の序文によると、詩集は五編に及び世に広く持てはやされているが、家集は二巻のみであり歌数も少なく、師に懇願し家集を受け出して上梓の運びとなったことが記される。直保の小伝には、龍家は源経信の後裔であり、家祖善則から龍姓を名

乗り代々伏見に住したこと、彦根藩に二十年出仕し、現在は鴨川畔に居し風雅を専らにする生活を営むことを記す。卷末に直勝の自詠五首を載せるが、これは直勝が草廬に歌の添削を乞うたところ、その中から五首を自撰し本家集に附すことを命じられたことが前文に記される。直恭・直保・直勝は人物は詳らかにし得ないが、同姓同国（淡路）、直の通字から見て親族で草廬の門人となっていたのであろう。寛忠は伊勢神宮祭主（『国書総目録』では本家集を寛忠の著作としているが、寛忠は序者である）。四二九首に及ぶ歌数と、二種の序文、跋文と小伝も附されていることを見ると、古稀を控えた草廬にとってこれまでの歌業の集大成となるべきものであったと思われる。これ以降家集の編纂はなく、晩年の二種の紀行文に本家集以後に詠まれた歌が見られるのみである。⁽⁹⁾

次に三家集の構成を見ておきたい。三家集は先述したように部類はされておらず、雑纂形式だが、重複して所収される歌が多くあり、たとえば『峯のまさかき』については、当該家集が所収する歌は全て『ならの葉』Ⅰ・Ⅱ類本及び『国風草廬集』に見え、独自歌はない。『ならの葉』Ⅰ類本も同様で独自歌はなく、独自歌を収めるのは『ならの葉』Ⅱ類本と『国風草廬集』の二集である。左に表を掲げておく（一）は『国風草廬集』の重複歌を除いた歌数である。以後歌の出典を示す際に『峯のまさかき』を峯、『ならの葉』Ⅰ・Ⅱ類本をなⅠ・なⅡ、『国風草廬集』を草と略称して掲出する）。

	峯	なⅠ	なⅡ	草	合計
所収歌	六〇首	六四首	七三首	四二九首 (四一七)	六二六首 (六一四)

独自歌 〇首 〇首 四五首 三七〇首 四一五首

なお同一歌が二家集以上に重複して所収される歌数が八九首あり、『ならの葉』Ⅱ類本・『国風草廬集』の独自歌と、重複歌を合わせると、三家集の実数は五〇四首ということになる。重複歌において詞書・語句に異同が見られるものもあり、編纂の不備も指摘できようが、理由は分からない。

次に三家集の特徴に触れておきたい。当期の家集は堂上・地下を問わず題詠歌が中心であるが、三家集の詠作の内訳を見ると、題詠歌と非題詠歌（贈答歌を含める）の比率はほぼ半々である。題詠歌には旋頭歌一首を含み、八首の句題和歌を数え、非題詠歌については目を引くのが贈答歌の多さであり、五一首を収める。贈答の相手は京の知人・門人、在彦根の友人が多く、詩集に次いで草廬の交友関係が知られる。この他折に触れて詠まれたものなど、草廬の心情を窺う上で重要な詠作がある。

なお草廬は墨帖を多く刊行しており書家としての世評も高く、竹葉体という書法も生み出している。この竹葉体については中野氏に言及があるが、¹⁰⁾『峯のまさかき』『ならの葉』Ⅰ・Ⅱ類本は当該書体で刻されており、半丁に散らし書き一首の体裁でその流麗な筆致を見ることができ、『国風草廬集』は竹葉体ではなく一首一行書きの通常の書体である。当該二家集は歌のみならず、草廬考案の書体も併せて鑑賞すべきであろう。

草廬の本領は漢詩文にあることは言うまでもないが、三種の家集が全て刊行されていることとその歌数を見ると、漢詩人の余技に止まるものとは思われない。次項から実際の歌について見ていくことにしたい。

二 草廬の和歌表現

草廬は宝暦八年頃彦根藩藩儒時代に賀茂真淵に入門した。それまで師に就くことはなく歌を独習していた草廬にとっては師説を受ける、あるいは添削を受けるといった経験をすることになった。宝暦八年頃より明和年間前半に成立したとおぼしき『賀茂真淵評草廬和歌集』は草廬歌二一八首を収め真淵の添削・批評が加わる。本書はすでに翻字がなされ、揖斐氏に真淵の評に対する検討も備わり、氏は真淵の標榜する上代古風に対し『古今和歌集』以後の後世風の歌を草廬が詠むことを批判しているとする。三家集に本書掲載の歌が九三首収められているが、ほぼ真淵の添削を反映せずにそのまま載せられている。すると草廬は師真淵の添削を無視、踏み込んでいえばその指導を拒否していることになる。中野氏は草廬歌を「当代歌壇の趨勢のまゝに古今調に基づく物」とされるが、三家集を見ると古今集以来の趣向・措辞・修辞を用いて詠まれており、当時の堂上・地下を問わず一般的な歌風だと思われる。

先ず草廬の歌風を見るにあたって、真淵の批評を足掛かりにしたいが、揖斐氏は草廬が掛詞や縁語を多用すること、新古今時代の歌人の表現を引き写して詠むことを非難していると指摘する。例えば氏の挙げる「かぞふればふこそあきはたつかゆみやそのみなとの風ぞ身にしむ」（『国風草廬集』所収歌）という立秋詠を真淵は「たつか弓のつゞけをやめて、たけ高く八十のみなとの秋の初風をよまれましたかば、よき歌なるべきを、をしき也」と評しており、「たつか弓（手束弓）」の「たつ」に秋が「立つ」を掛けているが、この続けがらが格調を損なうものとする。この他にも氏は真淵が掛詞を多用することを難じる例を指摘されるが、草廬は古今集以後の歌風に馴染んでいたことを思わせる。

三家集には掛詞・縁語などの王朝和歌以来の修辭を用いた歌が多くある。まず立春詠を見たい。

春たちける日

はるたつといぶぎのやまのさしも草けふより雪の下もえすらむ（峯・なI・草）

「いぶぎのやま（伊吹の山）」の「いぶぎ」に「言ふ」が掛けられ、伊吹山の縁で「さしも草」を詠む。伊吹に「言ふ」を掛ける例は藤原実方の「かくとだにえやはいぶぎのさしもぐささしもしらじなもゆるおもひを」（後拾遺集・恋一・六一二）歌が想起されるが、立春に際して伊吹山に「言ふ」を掛ける例は先行和歌にも見られる。⁽¹⁴⁾ 三家集中に立春詠は八首あり、右記歌も含め四首に掛詞を用いて詠む。

はるたちける日逢坂山をこゆとて

今日はまた関路の春にあふさかや杉むらかすみしみづぬるみて（草）

はるたちける日よめる

あかねさす彦子の山の松の葉の緑色そふ春は来にけり（草）

宝曆庚辰立春の日よめる

けふしこそ嬉しき春にあふみ路の末たのみある君に仕へて（草）

「今日はまた」歌は「あふさか(逢坂)」に春に「逢ふ」を掛け、「あかねさす」歌は「彦子」の「ひ」に枕詞「あかねさす」のかかる「日」を掛けて枕詞の修辭とともに詠み、「けふしこそ」歌も「あふみ(近江)」に「逢ふ身」を掛ける。当該四首は在彦根時代の詠作と思われるが、立春詠を詠むにあたり当地に関係する歌枕・地名を詠み、掛詞の修辭を用いてその趣を詠み表わそうとする。右記歌以外においても「いりあひのかねの音羽の山かぜに身をかへりみぬ夕暮ぞなき」(草)と詠じており、「かねの音羽」に「鐘の音」と歌枕「音羽(の山)」を掛け、「とへかしな都は三とせみるめなき此浦人となりはてし身を」(草)歌では、「海松布」と「見る目」を掛けた歌もある。この他にも掛詞のみならず、枕詞・縁語の修辭を施した歌が多々あり、和歌では常套の用法ではあるが、こうした技法に通じ、または好んで歌作していたことが知られる。

次に古歌との関係を見たい。

ありまにて秋立ける日よめる

ありま山いな、小笹一夜あけてけさそよ告る秋の初風(草)

猪名野は平安以来笹の名所であったから「小笹」を詠み、笹に吹く秋風の音を「そよ」と表現して秋の到来を詠み表わす。本歌は一見して大武三位の「ありまやまるなのささはら風ふけばいでそよ人をわすれやはする」(後拾遺集・恋二・七〇九)歌に拠ることが分る。古歌を下敷きにして、恋の歌から秋の歌へと趣向を変えて詠じたところに面白味を感じたのであろう。実は当該歌は『賀茂真淵評草廬和歌集』に収録され、詞書は「春たちける日よめる」、第五

句は「春の初風」とある。真淵は「こは秋をつぐるさまにこそあれ」と記しており、家集では「秋」に訂正する。真淵の指摘は正しく、草廬は当該歌に関しては真淵の言に従っている。が、古歌を下敷きにした歌であり、真淵の評価する作風ではないであろう。

雪いとふかう降侍りし日、小野の駅といふ所過

行けるに、かの在五のあそのをの、宮にて「夢

かとおもふ」と読しことを思ひ出て

こ、もまた夢かと思ふ同じ名の小野のうまやの雪の夕暮（草）

彦根南郊の小野宿を通り過ぎた折、その地名と雪が深く積もっている景を見て、『伊勢物語』（第八三段）の、馬の頭が比叡の山里小野に出家した惟喬親王を訪れた情景を重ね合わせて詠じた歌である。「ありま山」歌は古歌を下敷きにし、本歌は物語世界の情趣に浸って詠まれたものであり、草廬が古歌・物語を詠作のモチーフにしていたことは明瞭であろう。

また古歌の興趣に倣った歌としては、

兼好が鳴門の歌のまね

大井川木曾のみさかも何ならずうき世の道にわたりくらべば（草）

* 伝兼好歌「世中をわたりくらべていまぞしる阿波の鳴戸は波風もなし」

（林羅山『野槌』（元和七年成）所載／日本文学古註釈大成・徒然草古註釈大成『徒然草拾遺抄 徒然草野槌』

日本図書センター）

鼻河のほとりに、すみ所をうつしけるときは

秋のなかばなりければ、かの長明が石川の歌

おもひ出て

われもまた清きながれをたづねきてけふすみそむるいし河の月（草）

* 「いしかはやせみのを川のきよければ月もながれを尋ねてぞすむ」（新古今集・神祇・鴨長明・一八九四）

「大井川」歌は道歌めいているが、伝兼好歌が世の中で過こす難しさを急流で知られた「阿波の鳴門」と比べて詠むところを、草廬は大井川や木曾の水嵩に託して詠む。「われもまた」歌は長明の歌に倣い「すみ」に「住み」と「澄み」を掛け、清澄の辺に居を移し得たことを詠む。このように直接古歌の情趣に倣い歌作していることを指摘しておきたい。

以上、古歌・物語世界に取材した歌を見たが、次に他の歌風を示す歌を見る。

ひこねに在ける時秋のむしを

いぶき山やま風さむし虫のねもつりさせもが露底に鳴(草)

「つりさせ(綴り刺せ)」で蟋蟀の鳴き声を表わし、伊吹山から吹く冷たい秋風に呼応するかのよう、蟋蟀が露深い草の底に鳴く情景は、秋の寂寥をよく表現しているといつてよい。

鮎を詠んだ歌が二首ある。

月夜鴨川のさまをよむ

照月にそこすみわたるかも河やさばしるあゆのかずみゆるまで(なⅠ・なⅡ)

春の暮やり水のあたりにひとりごちて

さをもがなつらまくほしきかきつばた下行水にのぼる若あゆ(なⅡ)

「照月に」歌は澄んだ月の光が鴨川の底までを照らし、水中を素早く動く鮎の姿を捉えている。大隈言道の「流れる花に浮びて戯えてはまた瀬をのぼる春の若鮎」(草径集・九〇)歌のような鮎の巧みな動的表現性はないが、月に照らされた水底に鮎を見とめその動きを活写するのは集中最も清新な歌であろう。「さをもがな」歌は杜若が咲く辺の水中に若鮎の遡る景を詠む。晩春の景物である杜若に沿って遡上する若鮎の姿は「春の暮やり水」の辺で詠むのに相応しい景である。

草廬の歌の表現についてその一部を見た。大よそは古今集以来の趣向・修辞を用いながら歌作しているといつてよく、古歌を下敷きにして詠まれている歌もあった。晩年の三種の紀行文中の歌も本項で掲出した歌風であり、当時の一般的な歌風といえるだろう。草廬は古今集以来の趣向・修辞を自己の表現様式として歌作しているのである。

三 漢詩と和歌の交差

草廬の漢詩については従来古文辞派の詩風であるとされてきたが、近時草廬詩の特徴を示すものとして、藤田真一氏は陶淵明・李白の詩句を踏まえた作品が多いことを指摘し、両者の詩が草廬の詩作の糧になっていたとする⁽¹⁵⁾。これを受け安保博史氏は『草廬集』中の古人に「擬」す詩を挙げ、自己を淵明などの古人に擬えることにより、自身の生活・内面・自己の来歴を投影し、詩人としての矜持を再確認し、慰藉・鼓舞する一面があったと評価される⁽¹⁶⁾。福井智子氏は草廬の故郷である伏見を詠じた詩に焦点を当て、望郷という視点から解釈を試み、その詩に淵明の「桃花源記」にある詩句が詠まれること、当地の景物である桃花を多く詠み入れることで桃源郷に見立てていることを指摘し、それは故郷伏見への強い愛惜を基にしていると⁽¹⁷⁾。これらの見解は草廬の詩を読む上で貴重な指摘であるが、本項では草廬の歌と詩を比較したとき、表現の相似はあるのか、あるいはその趣向に通底するものはあるのか、ということについて見たい。

先ず草廬が終生思慕し続けた故郷、伏見を詠じた歌を掲げたい。三家集中に五首掲載されている。

秋の比伏見の家にかへり、あばらなる板じきにふせりて

住すてしふしみの里のあれまくもをじかふす也庭の蓬生（なⅡ・草）

*なⅡ「秋のころふしみの家に帰り、あばらなる板鋪にふつとよをあかして」

伏見の古宅にて

古郷の秋をとひきて終夜ひとり伏見の月ぞさびしき（草）

二首は伏見の旧宅を訪れた際の歌であり、一首目は住み捨てた故郷が荒廃している様を、庭に生い茂る蓬に雄鹿が臥す景に託して詠む。これは実景であつたかどうかではなく、「蓬生」「をじか（雄鹿）」と荒廃をイメージさせる措辞を用い、去つて久しい故郷の心象風景を描き出したものである。二首目は「伏見」に「臥し身」を掛け、独り旧栖で臥しながら見る秋の月の寂しさを詠じる。荒廃のようすと寂寥の思いが詠まれており、故郷に実際に身を置いたときの感慨が詠まれている。

次に、詩においては伏見の旧栖はどのように表現されているのであろうか。

乙酉春宦暇歸伏水舊栖有感而作 乙酉の春宦暇、伏水の旧栖に帰り、感有りて作る

歸來伏水水郷東 帰り来る 伏水水郷の東

故宅就荒人自空 故宅荒に就いて人自ずから空し

只管雀牙穿屋上 只管 雀牙屋上を穿ちて

生憎蜘蛛網窓窗中 生憎す 蜘蛛の窓中を穿くことを

經年稍盡青氈物 年を経て稍や尽く青氈の物

懷古堪驚白髮躬 古えを懷いて驚くに堪えたり白髮の躬

園有不言桃李樹 園に不言の桃李樹有りて

猶迎舊主咲春風 猶旧主を迎えて春風に咲く

〔草廬集〕三編卷之四

「故宅」は荒れ果てて誰もおらず、雀が屋根を毀ち窓に蜘蛛の巣が張ることとその荒廢を詠じる。前掲第一首目に通底する旧栖の捉え方である。尾聯では物言わない桃李の花が旧住人を迎えて微笑むと詠じる。他の伏見を詠じた詩では旧友と宴を催すことも詠まれるが、詩においては桃などの花も故郷を懐かしむ親しい景物であった。前掲二首目の月については詩において次のように詠じられる。

遙知故苑松蘿月 遙かに知る 故苑松蘿の月

寒影空臨舊弊廬 寒影空しく旧弊廬に臨まんことを

〔思郷／予仕宦于彦根者十年于茲矣〕『草廬集』三編卷之四

右は彦根にあつて旧栖を思いやつた詩だが、寒々とした月光がうらぶれた故宅を照らすようすを想像する。前掲歌は実際故郷を訪れて見た月を「さびしき」と表現していたが、詩において思いやられた予想は歌において追体験されているともいえよう。

伏見が桃の名所であり、草廬がそれに事寄せ桃源郷に擬えていることは前記福井氏及び安保氏に指摘があるが、家集に伏見の桃花を詠じた歌は一首見出せる。

ふしみ山は豊臣のおとゞさしもつくりみ

がける城なりけれど、時うつりて今は桃

の原となり、春のあはれいとふかし

物いはゞ花にとはまし伏見山扱も幾世の春やかれぬと（草）

豊臣氏が美麗を尽くして築いた城も時移り桃原となったことを詞書で記し、歌には幾世の春を重ねてきたのか、と桃花に尋ねる趣向の歌を詠むが、この「物いはゞ」に関連する語が詩に見える。

試問豊王全盛事 試みに問う 豊王全盛の事

桃花無語咲春風 桃花 語無く春風に咲う

〔伏水古壘桃花〕『草廬集』七編卷之三

詩においても桃を人に見立てて、伏見の旧事を尋ねる趣向が見受けられる。また、

桃花若語應相笑 桃花 若し応に相笑うべく語らばは

前度龍郎化白頭 前度の龍郎白頭に化す

〔伏水桃花〕『草廬集』五編卷之八

ともあり、草廬にとって伏見の桃花は往時を親しく問いかけるべき存在であった。

伏見を詠じた江戸期の詩は桃花や豊臣氏の儂い栄華を詩材としたものが多いが、その中であつて草廬の歌と詩の両様に詠まれる伏見詠は、自身の故郷であつたことを第一とし、桃花を詠むにしても単なる景物ではなく、故郷の象徴であり、当地の歴史を回顧するものであると同時に、自身の旧事を語りかけるべき存在でもあつたのである。

次に安保氏が指摘する事例を見たい。氏によれば草廬と幽蘭社中にその活動の初期から「張翰適意」の故事に基づく語が頻用され、草廬及びその門下の愛用語であつたとする。「張翰適意」の故事は『晋書』（卷九二）を典故とし、『蒙求』に採録される。東晋の張翰が洛陽で官吏をしていた折、秋風の起つのを見て、故郷である江南呉県の蓴菜の羹と鱸の膾の味を思い出し、官界に身を置き名誉と地位を求めるよりも、故郷で自適に世を過ごす方がよいと思ひ立ち、都を辞した故事である。氏によつて『草廬集』及び『金蘭詩集』（草廬編／宝暦四年刊）の用例が挙げられているので再掲は避けるが、「蓴羹・蓴菜」「鱸魚・鱸膾」の語が詠まれ、名利や俗事に関わらない生き方への憧憬を趣向とする詩を賦している。この「張翰適意」を趣向としたとおぼしき歌が一首ある。

つかへをかへしける時よめる

あなうれし冠はかけつけふよりは此秋の江にすゞきつらばや(草)

草廬が彦根藩を致仕したのは安永三年であつたが、その折の心境を詠じた歌である。仕えを罷めた解放感を喜んでゐるが、下旬の秋の江に鱸を釣りたいとするのは、おそらく前記した「張翰適意」の鱸に材を得ているものと思われ⁽²⁰⁾。張翰の帰郷を思い立った季節と自身の致仕した(実際の致仕は冬)季節を重ね「此秋の江」とし、張翰が官を辞め帰郷を思い立った鱸膾の「すゞき(鱸)」を詠み表わし、あの張翰は鱸膾を思い出し出仕を辞め故郷へ帰つたが、私はその鱸を釣りたいものだ、と言ひ換えてゐるのではないか。では釣るといふ趣向はどこから出てきたのだろうか。安保氏は草廬の詩に柳宗元「江雪」の「孤舟蓑笠翁 独釣寒江雪」に因む詩句が随所に見られ、それは「吏隠」(低い官職に身を隠す者)としての自己認識が示されてゐるとされる⁽²¹⁾。例えば『草廬集』には「化作寒江釣雪翁」(所思)三編卷之六)、「自今復作釣魚人」(帰江湖)同上)、「今則江湖一釣翁」(七月一日同江穆圭平師古遊鳧西水楼)四編卷之六)とあり、自らを漁者に託して詠む。翻つて前掲歌を見ると、「張翰適意」の官を辞すことと鱸という素材、そして今見た一漁者となり釣り糸を垂れる姿を詠む詩とを重ね合わせると、両者の趣向が融合して詠まれた歌ではなかつたかと思われる。官職を離れるに当たり、以前から草廬の詩作の糧になつてゐた二種の趣向が一首の中で同時に共鳴しているものと見たいのである。

四 草廬の和歌についての言説

草廬には歌論書はないが、所々で自己の歌についての見解を述べている。その第一に挙げられるのは真淵に入門した草廬が師の真淵に問うた『答問遺章』（宝曆十年成。『龍のきみえ賀茂のまふち問ひ答へ』）である。すでに中野氏が内容をまとめられ、揖斐氏にも論考が備わる。二氏の引用・解説と重複する所もあるが、本項では草廬が和歌についていかなる見解を有していたのかが知られる言説を見てみたい。同書第十七条には草廬の和歌観と同期の堂上歌壇に対する批判が見られる（草廬の当該条文を掲出順に番号を付す）。

- ① 一歌はもといにしへには人々己が身に大なるよころびあるか、或はうれひあるかなどの時、たまくその志をのべたるもの也しを、漸々さかむになりしより、歌をなくさみよみしゆゑもてあそびとなりしより、題詠など出てきて歌てふものはるかに降りぬるならむ。猶周詩くだりて唐詩となりて、もてあそびとなりはてしとおなじからむとおぼゆ。

冒頭は中世以来の歌に対しての批判である。自身に「よろこび」「うれひ」などの心情が起ったときその「志」を詠むべき歌が、次第に遊び物となり、終に題詠という詠作法が現れて本来の歌の姿が失われ、それは唐土で『詩経』に歌われる真実の詩が唐代に遊び事になってしまったのと同じであるとする。つまり真率の実情を詠むはずの歌が後世慰みのための玩具に退廃したことを難じるが、真淵の「(上略)心に思ふ事あるときは、言にあげてうたふ。こを

うたといふめり。かくうたふも、ひたぶるにひとつ心にうたひ、(中略)故いと末の世となりては、歌の心ことばも、つねのこ、ろ言ばしも、異なるものとなりて、歌としいへば、しかるべき心をまげ、言葉をもとめとり、ふりぬる跡をおひて、わがこ、ろを心ともせず、よむなりけり」(『歌意考』(精撰本)。寛政十二年刊)の言と通底するものがある。両者は歌を詠むという行為についてほぼ同意見だったはずである。題詠の問題については真淵も苦慮しているが、本条の答に真淵のそれにあたる言がないため、同書第三条の間に答えた言を挙げて置きたい。

一 歌を題詠にいたし候事後世のこと、存候。余は已後は題詠をかたく相止め可申と存候。いかゞ。

答後世の歌先は題詠にてそこなひそめたり。よておのがかたには歌会にもはしに詞を書いてよみ侍り。又は絵などをとりませ侍り。されど古今六帖の題の書様などは風流なるも有。雑思といふ部に書し題どもをかしければ、さる題はよませ侍り。(中略)且題におそれず、題をとりつかふごとくよむぞよき。後の習をひとつもな用ひ給ひそ。

今後題詠を詠まないとする草廬の言は当期にあつては大胆だが、真淵は自門の題詠に対する取り組みを紹介し、『古今和歌六帖』「雑思」(第五帖)所載題は「書様」が風流なのでそのような題は門人に詠ませており、題に萎縮することなく「とりつか」のように詠むことを勧める。「雑思」は「しらぬ人」「いひはじむ」「としをへていふ」などと仮名書きにされているが、このことは『にひまなび』(明和二年成)に「題などは六帖ぞよき。中に雑の思てふ条に書ける題の言葉ども面しろし。後世人は文字題にてよむからに歌の姿かたなく低し。同じ言をも仮字に書きたる時

はよむ歌もおのづからゆたかにみやびて出でくめり。」とあり、同様の見解が示される。²⁶⁾ 真名表記題は堅苦しく仮名表記題は「風流」であり、自然とおおよんで優雅な歌が詠出されるようであるとす。真淵の家集には題詠歌が多々あり、実際の歌作と理想の歌作に隔たりがあるが、前記したように草廬の家集全体の題詠歌と非題詠歌はほぼ半々であり、同時代の家集と較べ非題詠歌が突出して多い。専門歌人ではなかったためより自由な歌作を為し得たともいえるようが、①の言と右記の言とを思い合わせると、題詠よりも実情を詠む非題詠歌を重視していたと言えるだろう。

①の問に対する真淵の答は最初に「答示し給ふごとし」とあり草廬の考えを肯定した上でこう記す。

されど今となりて、いにしへの世をも人をも語をもしらむには歌にしくものなし。史などにてひとわたりを知がうへに古意を見て、己もそれに似つかばやと思ひて朝夕によむが為には教へずして、古人のこゝろことばを知るなり。さてこそ古のその世は人のこゝろかくぞ有してふをふかくしらるべし。しかればたゞ心に思ふ故ありてのみよみしはいにしへのことにて、今は業としてつとめずは、いかで古歌の風にいたらむ、いかで古世をもしられむ。たゞ芸とおもふ筋をやむべき也。

古代・古意・古人の心・詞を知るために歌―古風―に就き、その風に似せたいと思ひ朝夕倣い詠むので自然と古人の心が知られ、そうしてこそ古人の心が深く理解できるとする。心に思うことをそのまま詠じて歌になったのは古のことで、当世は修練しなければ古歌の風に至ることなく、古き世も知ることができないとする。草廬の言を肯定した上で実際の古風に至るための方法を示している。

②なにとぞいにしへにかへし度事にて候時勢なれば是非なし。ことにいつころよりか緋紳家の業となり終に伝授事出来、士庶はいかやうの善説善歌ありても、たれとり上ることなきやうになり行候事、さて／＼なげかしき御事と奉存候。貴君など御高見さぞ／＼と乍憚御推察仕候。せめてかやうのことを語り合申人もなく、たま／＼歌よみ候人は緋紳家の教を最上の事と心得、一向予がかやうの説などは狂気のごとくいひ、また少し文字好の人は歌のことよりはじめ、日本のことはいやしきことのやうにおもひて耳にも不入。さて海内の知己はたえてなく候。東武はヒロキ所に候へば御知音も多く御ざ候半と御うらやましく奉存候。

①に続き、返す刀で中世歌学に基づく堂上家の伝授事を批判し、地下人がいかに善き説を出し善き歌を詠しても誰も取り上げない現状を嘆く。さらに一般の歌人も堂上家を崇め、自分の見解には耳を貸さないと述べる。古今伝授などの堂上の伝授・歌学を批判したものとしてはすでに戸田茂睡『梨本集』（元禄十一年成）があり、荷田在満『国歌八論』（寛保二年成）にも堂上家の歌学のありようを手厳しく批判する言がある。同時代の本居宣長『排蘆小船』（宝暦九年頃成）にも古今伝授の説は信じるに足らないものとする。伝授に関する堂上への批判・反発は宝暦年間には目新しくないが、草廬は堂上の伝授、当世の歌人が他を見ず、堂上家を一向に尊むことを批判する。宝暦年間の京には堂上に冷泉為村・有栖川宮職仁親王の存在があり、なおその権威が強い時代であつたので「海内に知己たえてなく候」と記すのであろう。寛政年間になると小澤蘆庵『布留の中道』（寛政二年成・同十二年刊）が刊行され、伝授事・制詞などは本来ないと攻撃するが、草廬は同時代の堂上家に批判的な地下歌人と同じ考えを有していたことが知られ

る。この後「京都或は当境などは一人も無之（下略）」とあり、歌に同志を得ないことを嘆く文で本条の間を終える。これに対し真淵は草廬の堂上家批判に関して、王威が衰え臣下の権柄が強くなり、天下の人々が万事縉紳家に従うようになり、鎌倉期以降政治に携わることがなくなったので、「遊芸」の家として我が家を存続させようとする「俗意」から起つたのだとし、これも王権の盛衰によるものであるとする。次に、

しかれば今はたゞ学問も歌も世の益になさむとするは却て短氣のことなり。何となくこのまじきに入て楽しみとせんのみ。もし千載に友出来ば幸ならむ。また天地日月の今古同じければ、又いにしへにかへる代あるまじともいふべからず。さる代もあらば万一も用ひられんなどしられぬことをせめてはおもふのみ。（以下略）

と記し、政教主義的な考えを捨て「学問」「歌」も自己の楽しみとし、千年後の同志を期し、時勢の回天を待つべきとする。次に江戸において少数ではあるが古風を好む人士がおり、契沖の書も読まれ、万葉歌なども披見されるようになったことを記し、①②の草廬の言を歎ぶ言葉で締めくくられる。このように真淵は草廬の問に対して丁寧な自説を述べており、古風へ教導しようとする。真淵からすれば進んで入門した草廬は万葉歌を中心とする古風を志していたと思つたろうが、草廬はそうではなかった。②の「いにしへにかへし度事にて候時勢なれ」ばとある「いにしへ」は真淵にとっては古風を指すことは明らかだが、草廬は別の方向を向いていたようである。例えば、

予講学の暇古今集を読んで其の奇絶なる者は、胸襟曠達にして詞義婉曲なるを愛す。⁽²⁷⁾（原漢文）

という言が見られ、古今集の「詞義婉曲なるを愛」することを表明している。前項で見た草廬の歌は掛詞などの修辭が多く、古今集以来の歌作に基づくことを述べたが、真淵の添削を反映せずに三家集に掲載していることや右記の言を見合わせるならば、草廬は元来真淵の古風を吸収する素地を持たず、専ら詠作基盤に古今集を置いていたと思われる。最後に「あふみの国ひこねといふ所に住なれて後」と詞書された歌を掲げておこう。

逢坂のこなたとよみし都路を関のあなたに今はなしつる（草）

都住まいのときは都路は逢坂関の「こなた」であったが、彦根住まいになってからは都路は「あなた」となつてしまつたと詠む。都から離れた疎隔感を詠むが、古今風の所謂理的発想に基づく歌であり、前記「詞義婉曲」を歌作の拠り所としてゐることが知られるのである。

おわりに

最後に草廬がなぜ詩を詠む傍ら歌をも詠じているのかという問題について考えてみたい。草廬の語るところに拠れば、龍家は源経信の後裔であるという。経信は歌人として『経信集』があり、『後拾遺集』以下勅撰集に八七首入集し、

「ゆふざればかどたのいなばおとづれてあしのまろやにあきかせぞふく」（経信集・秋・二〇三）歌が『百人一首』（七一）に採られた平安後期の歌人である。草廬自らは漢詩文を以って身を興したが、和の血脈をたどれば大歌人経信に至ることは、自身に歌人の血統が流れていることを強く意識したのであろう。この家系については草廬自身何度も記している。また父善昌は契沖の門人であり、後年父が書写した『漫吟集』を天明七年に上梓し、自身も円珠庵所蔵の契沖の家集を書写している。²⁸ 経信に至るとする、家系に対する意識と父の営みは草廬に歌を詠ませる契機になったと思われる。

今一つは時代性であり、それは漢詩人が和歌題で詩を詠む例が見られることである。近世前期に姫路藩の儒者松井可楽が当地の一の宮再興を祝い『頓阿百首』題で七言絶句を賦した『和歌題百首詩』（元禄十七年刊）があり、木下順庵、伊藤東涯にも和歌題による詩作がある。²⁹ 中期以降には六如と皆川淇園の合作した『六如淇園和歌題百絶』（文化十五年刊）があり、六如には『六如菴詩鈔遺編』（文政六年刊）巻下に「倭歌題」と題した一六三首の七言絶句が存し、菊池五山には『和歌題絶句』（文政七年刊）がある。注目すべきは大典顕常の詩集『北禅遺草』（文化四年刊）に、「西行歌」とめこかし梅さかりなる我が宿をうときも人はをりにこそよれ」（西行法師家集・三三三）と、「元稹「古寺」の「花時不到有花院 意在尋僧不在花」の転句・結句を引き、西行歌については風雅を愛する人の交際は情誼によらず風流により、元稹については世塵を離れた情がその光景に表出されているとする。その上で西行の歌は「主にして優なるは彼の勢利に趨きて韻致に乏しきは恥づべし」（原漢文）とし、元稹の詩は「客にして厚きは彼の般楽を事として軽薄を競う」とそれぞれの難を挙げ、そこで「一首は西行を述す。一首は元稹を述す。一首は自叙す。」³⁰とし、西行歌・元稹詩を基にした詩作があり、歌と詩を同時に翻案していることである。³¹ 近世期には和歌題での詩作が多く

見られ、詩の側が歌の情を汲み取ろうとし、大典においては一首の歌の趣向を詩に移して新たに賦した例も存する。草廬にも和歌に関する題での詩作があり、一首掲げておきたい。

木幡秋砧和歌多詠搗衣者故題之

木幡の秋砧和歌多く搗衣を詠めば、故に之を題す

一宿木幡山里秋

一宿 木幡山里の秋

寒砧動處月華流

寒砧 動く処月華流る

征人今夜何無淚

征人 今夜何ぞ涙無からむ

斷續聲哀搗旅愁

斷続声哀 旅愁を搗く

〔草廬集〕七編卷之三

分注に歌において木幡では多く「搗衣」を詠むので題としたとあるが、歌枕と特定の景物の結び付きに興味を覚えて詠じたのであろう。途切れがちに聞こえてくる砧を打つ音に旅愁が募り、旅人は涙を流すと詠じ、歌の世界が紡いできた情趣を詩に移して詠む。無論「砧」は六朝以来の詩題であり、李白の「子夜呉歌」などの詩に婦が夫の帰りを待ち侘び、その砧を打つ音に寂寥を感じる詩情を王朝期の歌が摂取したのだが、草廬は詩由来の題材を和歌経由で再度捉え直し、新たに詩作しているのではないかと思われる。搗衣題で詠まれた歌一首を見ておきたい。

聞搗衣

聞人に秋の泪のかゝるともしらでや余所に衣うつらん（草）

秋夜、砧の声を聞き寂寥の思いに駆られる心持ちを詠じており、「擣衣」題の本意に沿って詠まれている。草廬は詩作・歌作において和漢が共有した詩情を歌っていると言える。

草廬が多くの歌を詠じた詩人であったのは、自身の家系及び父の存在という内在的な要素、同時代の和歌題撰取に見られるような詩の側からの歌への接近という二つの要素があったと思われる。草廬の場合、詩を本領としながら生涯に渡り歌を詠み、漢と和の両様の表現性を持ち得たことにその特色があるように思われるのである。

注

- (1) 中野三敏「龍草廬」(中村幸彦編『大東急記念文庫公開講座講演録 近世の漢詩』汲古書院、一九八六年)
- (2) 琴台・霞舟は京に古文辞学を広めた宇野明霞に就いたとするが、山室士錦の「龍草廬先生傳畧」(『草廬集』初編)では独学して荻生徂徠、太宰春台の経学・文章を学んだとある。何れにせよ時代性を考えると、草廬の修学時代は古文辞学を学んでいたことは確かである。
- (3) 松下忠「龍草廬」(『江戸時代の詩風詩論―明・清の詩論とその撰取―』明治書院、一九六九年)
- (4) 日野龍夫氏の草廬の詩作に言及する論文として「蕪村と漢詩」(『宣長・秋成・蕪村 日野龍夫著作集第二巻』ペリカン社、二〇〇五年)がある。氏は「自君之出矣六首」(『草廬集』二編卷之二)「其五」に男が去ったことを悲しむ女の心持ちを詠んだ「思君如楊柳 風前乱成糸」の表現は詩に柳の糸の乱れを心の乱れに喩える例がないわけではないが一般的な趣向ではなく、歌人でもあった草廬にとっては「春雨の降りしところは青柳のいと乱れつつ人ぞ恋しき」(『新古今集』恋四、一二五〇)などの歌の方が身近な先蹤であったろうとし、「つまり草廬の詩における柳は中国の伝統によって結びつき、日本の伝統によって恋に結びついている。」とされ、草廬の詩作における和歌の影響についての示唆的な言がある。
- (5) この他漢詩人・儒者で家集が存するのは藤原惺窩『惺窩集』(二三五首)があり、『和歌文学大辞典』(明治書院、一九六二年)

には「儒者と和歌」の項目に家集のある近世期の儒者十八名を掲出する。草廬に関しては『峯のまさかき』『ならの葉』を掲出するが、『国風草廬集』は掲出されていない。なお荻生徂徠に『護園歌集』（全九七首）があることを中野三敏氏が報告されている（『雅語俗録 陸』『雅俗』第六号、雅俗の会、一九九九年一月）。

(6) 中野三敏「草廬昼錦」（『江戸狂者伝』中央公論社、二〇〇七年）

(7) 揖斐高「賀茂真淵の和歌添削―自筆本『賀茂真淵評草廬和歌集』を通して」（『近世文学の境界―個我と表現の変容』岩波書店、二〇〇九年）

(8) 雲岡梓「麗女と草廬」（『荒木田麗女の研究』和泉書院、二〇一七年）。雲岡氏は草廬と親交のあった荒木田麗女の草廬観及び麗女も万葉集の語彙とその表現を詠じており、後世の言葉までこだわりなく用いていると評し、草廬と麗女の接点を指摘する。

(9) 天明二年以前に成立した紀行文に『南遊詩冊』（安永五年刊。国会図書館蔵。請求記号、詩文163.82）があり、その巻末「南遊草附」に八首（この内四首が三家集所収歌）が収録される。天明二年以降の紀行文には以下の二種がある。『草廬先生大和道之記』（天明二年序刊。大阪市立大学森文庫蔵。登録番号、J-11360）に草廬歌十九首を収める。『草廬先生河内道之記』（天明三年刊。森文庫蔵。登録番号、J-11423）には草廬歌十八首を収める。

(10) 注(6)に同じ。

(11) 揖斐高他「成蹊大学図書館所蔵『賀茂真淵評草廬和歌集』―翻刻と解題―」（『成蹊人文研究』第14号、二〇〇六年三月）。本稿の引用は同翻刻に拠る。

(12) 注(7)に同じ。以下、揖斐氏の言は同論文に拠る。本書の成立時期は同氏の見解による。

(13) 注(6)に同じ。

(14) 中古・中世期の和歌から二例を掲出しておく。

春さぬといまはいぶきの山べにもまだしかりけりうぐひすの声

（古今和歌六帖・二・山・きせんほふし・八八八）

春たつといぶきの山のしら雲のかかるこずゑは花ぞ咲くらん

（歌合文永二年・山花・右・通成卿・二）

(15) 藤田真一「其角・草廬・蕪村」（『和漢比較文学叢書16 俳諧と漢文学』汲古書院、一九九四年）

(16) 安保博史「龍草廬―擬することの意味―」（『群馬県立女子大学国文学研究』第二十五号、二〇〇五年三月）

- (17) 福井智子「伏見の桃を詠む―『草廬集』を中心に―」(『大阪大学言語文化学』第6号、一九九七年三月)。福井智子「望郷の詩人龍草廬―(和漢比較文学)第二十号、一九九八年二月)。
- (18) 本稿の『草廬集』の引用は国立公文書館内閣文庫本(請求記号、206-37)に拠る。
- (19) 安保博史「龍草廬研究ノート(2)」(『九州大谷研究紀要』第22号、一九九五年十月)
- (20) 先行歌に「張翰適意」に基づいて詠まれた歌が三首ある。
とどむれど不留といへる事を
- 秋風にすずきのなます思ひいでてゆきけん人の心ちこそすれ
フルサトノナニハノナミノオモヒタツヨリシモソデニアキノウハカゼ
(散木奇歌集・恋上・一一二二)
- さらでだになにはの波にさそはれて袖にかさねてあきのはつかぜ
(片仮名本蒙求和歌・張翰適意・三五)
- (21) 安保博史「龍草廬研究ノート(1)」(『九州大谷研究紀要』第20号、一九九三年十二月)
(平仮名本蒙求和歌・張翰適意・三三)
- (22) 注(6)に同じ。
- (23) 注(7)に同じ。
- (24) 『増訂賀茂真淵全集 第十一卷』(吉川弘文館、一九三二年)。本稿の引用は同書による。
- (25) 『日本歌学大系』第七卷。『にひまなび』も同書による。
- (26) 高野奈未「真淵の題詠観」(『賀茂真淵の研究』青簡舎、二〇一六年)。高野氏は真淵は絵の題や詞書の題を効果的に用い題詠を行っており、それは実感の尊重のみにとどまらず、旧来の和歌に用いられてきたある種の虚構性さえもが備えられているとする。
- (27) 国会図書館所蔵(請求記号、104・188)。「東路日記」は伏見稻荷社の荷田信郷が宝暦十年江戸へ旅したときの紀行文である。現存未詳。
- (28) 天明七年版『漫吟集』(二冊)は四季部のみ刊行。龍公美(草廬)筆写本『漫吟集』二十卷四冊(西尾市岩瀬文庫蔵)本の翻刻は築瀬一雄氏『碧沖洞叢書 第十五卷』(臨川書店)第九十四〜九十八輯に所収。なお築瀬氏には草廬筆写本に関する論考「『漫吟集』伝本考(三)龍公美筆写本について」(『築瀬一雄著作集五 近世和歌研究』加藤中道館、一九七八年)がある。
- (29) 木下順庵『錦里文集』(天明七年刊)に「和歌題」として十七首を所収し、伊藤東涯『紹述先生詩集』(宝暦十一年刊)に「十

菊詠／四月廿五日、山本通春の需めに応じて和歌の題を用ゆ。別に後序有り。」(原漢文)と題し十首を収録する。

(30) 『詩集日本漢詩 第六卷』(汲古書院、一九八六年)。なお大典の当該詩は七言絶句である。

(31) 和歌を漢詩訳することはすでに菅原道真の『新撰万葉集』において行われており、『寛平御時后宮歌合』などから選んだ歌に七言絶句を付している例がある。また漢詩句を題にした大江千里の『句題和歌』、漢詩文の詩句と和歌を分類し配置した藤原公任の『和漢朗詠集』があり、漢詩と和歌の交渉は平安期から存する。中世には和漢聯句の存在、後土御門天皇が公家に中国の人名・地名を題にして和歌を、禅僧には日本の人名・地名を題にして漢詩(七言絶句)を進ませた『文明易然集』がある。近世初期にはこれに倣った後水尾院下命の『易然集』が存し、和歌と漢詩の合作による撰集がある。池澤一郎氏は和歌が漢詩から摂取した趣向や措辞に関する研究は王朝和歌を中心に研究史が存するものの、日本人の漢詩人が和歌から何を学んで表現をより豊穡にしているのかという問題は等閑視されているとし、漢詩が高度に洗練され、日本化を果たしたとされる近世後期の漢詩における和歌の摂取のありようについての考察は始ど提出されてないと発言する。氏は菊池五山・六如の和歌題漢詩を一首ずつ掲げ、結論として近世後期の和歌題漢詩について考察する場合は、「漢詩、和歌、俳諧の三つどもえの構造に留意すべきことが必要となるであろう。」とする。漢詩と和歌の交渉・影響は本文で触れた通り近世に入り、前代にもまして活発に行われている。池澤氏の発言は同期の和歌題漢詩を見る上で参考になろう。また草廬などの家集のある漢詩人に関しては一人において詩人・歌人の両面を持ち合わせており、個人内部での詩と歌の相互影響も想定できるものと思われる。

*池澤一郎『和歌と漢詩―和歌題漢詩について』(『江戸文学』【特集】近世和歌と古典学』第二十七号、ぺりかん社、二〇〇二年十一月)

【付記】

引用の本文には旧字・異体字を通行の字体に改め、私に清濁・句読点を施した部分がある。なお草廬以外の歌の引用は断りのない限り新編国歌大観に拠った。

(いとう・たつし／本学非常勤講師)